

修論題目「『字鏡集』の基礎的研究」

本稿は、鎌倉時代成立とされる単字掲出漢字字書である「字鏡集」について、その研究の基礎構築に貢献しようとするものである。最終的に問われるべきは「いかなる目的のもとに成立したのか」であるが、本稿ではこれを問うための準備段階として、大きく分けて3つの視点から検討を行っている。

第1に、「現存『字鏡集』諸本の調査（第2章）」。

調査そのものは未了だが、諸本の関係性の整理・先行研究の訂正や補足・新たな課題の発見などにおいて成果を得た。

第2に、「近世期を中心とする『字鏡集』利用・研究史の記述（第3章）」。

主に「字鏡集」研究が、それをを行う環境によって限界づけられていたことを確認している。資料閲覧の制約が常に問題となる文献学にとってこの「研究環境」は重大な問題であり、この観点から研究史を俯瞰することは、研究史の正しい評価のためには不可欠である。

第3に、「目的性の観点より見た『字鏡集』の成立・展開の考察（第4～6章）」。

「字鏡集」の基本的な構造や、それを構築した編纂プロセス、及びその背後にある目的性を検討している。「字鏡集」諸本には、異質な二種の掲出字配列構造が見られ、それは展開史上の新旧に対応することが指摘されている。本稿ではこの二種が、それぞれ異なった目的性に基づき成立したものとしてではなく、ある一つの構造を目的として達成しようとするための一連の編纂プロセスにおける、異なった到達段階の顕れとしてある、という解釈が可能であることを示した。

本稿での検討は、いずれも「字鏡集」研究・解釈の基礎に関わるものである。この検討を通じて明らかになった問題について、さらに今後検討していく必要があるだろう。